

—地域住民で継ぎ足す黒島遺伝子— 「くろしま一休舎」

いちきゅうしゃ

黒島地区で積み重ねられてきた日々の暮らしの知恵、伝統、住まい方などを地域遺伝子として、それを継ぐ、伝える、残す、見せる、育てる場として、さらに新たに生む、加える、甦らせる場とする。

黒島の人たちは時間があれば立ち寄り、あるいはそこに行けば誰かがいるという場。暮らしの息づかい、匂い、音など五感で黒島の遺伝子が体現できる場。



暮らしカル

classical

くろしま暮らし

かつて黒島では町の七十人で一株つつ持ち合った黒島株式会社で町を治めていた。一年に一回交代で村の人を食事に招待しており、村の人同士で食事をするという事が行われていたという。

人溜まりとなる「くろしま一休舎」
—そこに行けば誰かがいる、という場所—

みつぼ間の中庭やいろり、土間など旧角海家の住宅部分の取り扱いは変えず、くろしまでの普段の暮らしを伝える貴重な場としてそのまま利用する。

向かいの文庫で借りてきた本を読む、習字やお茶など趣味の場として使われるなどして、常に解放された場である。

七草がゆの会

—七地区住民で運営する食事の会—

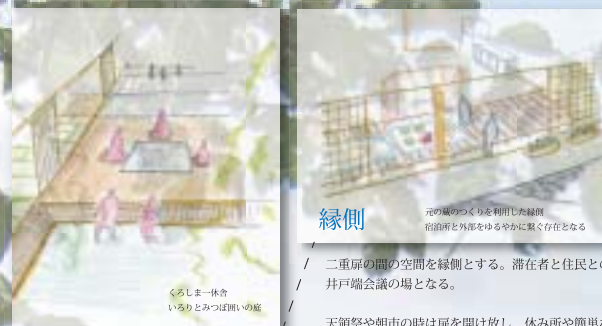
黒島遺伝子を受け継ぐ七草がゆの会では、共同で料理をすること、食事をとることを楽しむ。

一人暮らしのお年寄りにも食事を提供し様子を伺う。

宿泊者への朝食（くろしまわがごはん）づくり。

七種の野菜を素材とし一つの料理として提供する七草がゆの会。黒島七つの地区の住民で調理し、食事をする会。

調理者は交代制であり三地区内で1、2人が参加する。



縁側

元の風のつくりを利用した縁側。宿泊者と外部をゆるやかに繋ぐ存在となる。

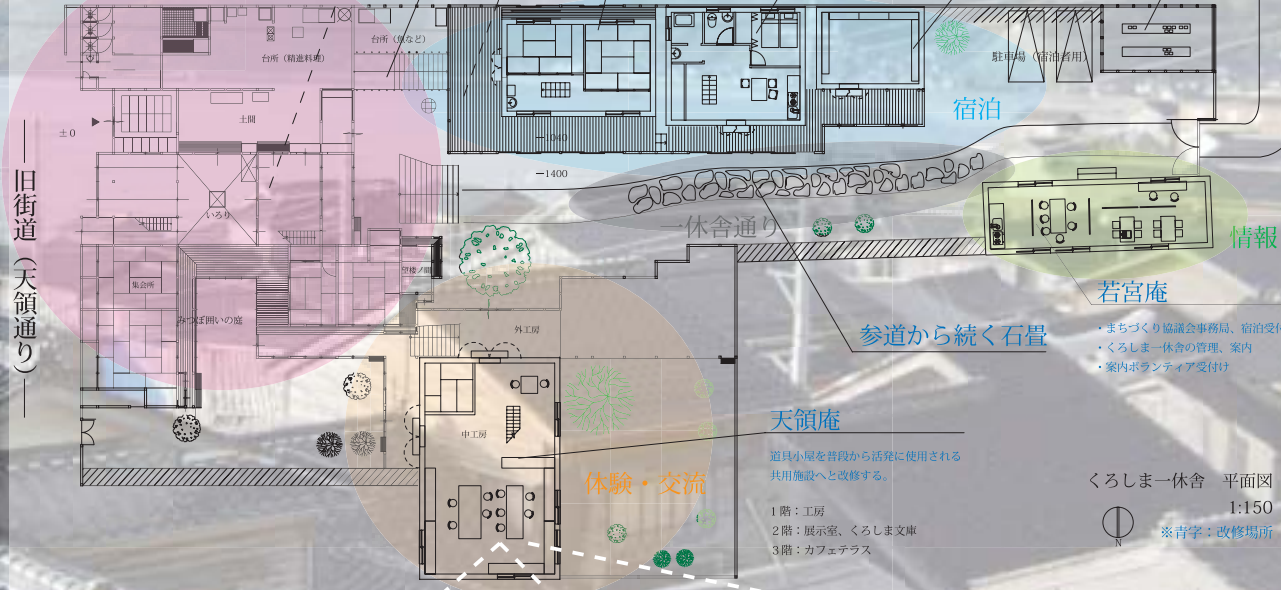
二重扉の間の空間を縁側とする。滞在者と住民との井戸端会議の場となる。

天領祭や朝市の時は扉を開け放し、休み所や簡単な作業場、商品を陳列する場として利用される。



一休舎へ誘う石畳。定期的に朝市が行われる。

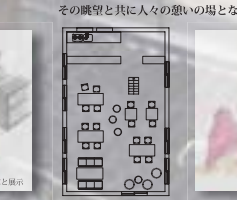
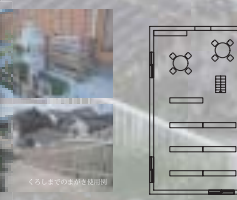
地域住民共有 × 来訪者



1階: 工房
山車の修理、まがきのワークショップ、製作場所として使用される。

2階: 展示室、くろしま文庫
共有の文庫、くろしま・旧角海家の歴史のパネル展示室

3階: 茶房
一休舎唯一の3階。七地区住民で分担し運営する茶房では、その眺望と共に人々の憩いの場となる。



路面チック

romantic

通りのにぎわい

一休舎の南側は若宮八幡神社へと続く参道、東側は天領祭でも使用される旧街道(天領通り)が走る。どちらも人々の生活に欠かせない主要路であり、一休舎への引き道となる。

—神社へと、一休舎へと続く石畳—

旧角海家の敷地内、現在は砂地になっている通りの舗装を参道の石畳と合わせる。公共空間である通りから一休舎へ人々を誘導すると共に、参道の付加価値を高める。

通りでは朝市や蚤の市が行われ、人々のにぎわいで溢れる。



招待ム

show time 伝える、見せる

くろしまの暮らし(地域遺伝子)を肌で感じる滞在施設

—くろしまわがごはん—

地域住民と共に作るご飯、土間を削い、みつぼ間の庭を臨んでとる食事は、外来者にとっては非日常体験であり、地域住民の生活を感じることとなる。

朝食は地域の人たちが地元産の食材で普段の食事が提供される。

—まがきのワークショップ—

くろしまの風景の一つとして、まがき、ひばがある。竹を用いて、人工物を風景になじむよう隠したり根根として応用している。工房では、このまがきをふくつたり、来訪者に体験してもらおう場所、住民の共用工房となる。

—改修—

元々蔵として使用されていた南側の建物二棟を宿泊処として改修する。

道具小屋も同じく、普段から活発に使用される共有施設へと改修する。



増すコミュニケーション

mass communication

多様な交流から生まれるもの

くろしま一休舎という建物を核として、地域住民同士、来訪者と住民間の交流が増す。

「若宮庵」は、一休舎の玄関として、黒島、旧角海家の歴史、情報を発信する場として再生する。宿泊者の受け、まちづくり協議会の事務局、一休舎の管理・運営がその主な内容である。

天領祭や黒瓦の町並み、おもてなしの心、残されてきたくろしま遺伝子を継ぎ、そして足していくことで人々が誇りをもち生活できる地域を守っていくことができる。